[課程-2]

審査結果の要旨

氏　名　　大宮　朋子

本研究は、我が国の HIV 感染者の就労と社会生活に着目し、【研究１】では、HIV 感染者の全国調査データの二次分析を行い、HIV 感染者全体の就労状況を把握するとともに、就労者と非就労者を比較しその違いを明らかにすることで、HIV 感染者における就労の現状を概観した。また、就労している HIV 感染者の QOL に影響を及ぼしていると考えられる労働職場環境条件等について、精神健康を指標として明らかにした。【研究２】では【研究１】を踏まえて彼らの困難の詳細を明らかにするとともに、ストレス対処能力 SOC（Sense of Coherence）を指標として彼らの成功的対処の姿を描くことを目的とし、以下の結果を得た。

【研究１】全国のエイズ治療ブロック拠点病院に通院する患者 2000 名に対する調査データの二次分析を行なった。就労者と非就労者の属性・特性の違いの有無を検討し、就労者の精神健康に関連する要因を検討した結果、就労者に比べ非就労者は、身体的・社会的・心理的に厳しい状態にあり、HIV 感染によって就労が中断すると再就労できない可能性が高いことが示された。重回帰分析の結果から、感染判明から 1 年以上経過していることと精神健康の悪化とに有意な関係があった。これは、HIV 感染者は職業キャリアの中断や停滞が生じる可能性や合併症・新たな副作用などに対する HIV 特有の長期不安がある可能性を示していると考えられる。また、本研究では因果は特定できないが、先行研究（縦断研究）から我が国の HIV 感染者においても就労していることが精神健康に良い影響を与えると解釈できる可能性が示された。以上より就労が HIV 感染者にとって重要な意味を持つことが示されたと考えられる。最後に就労者において self-stigma や労働職場環境に関する要因が精神健康において重要であることが確認された。

【研究２】就労経験のある日本人成人の HIV 感染者 40 名を対象に、面接調査を行った。回答してもらった SOC スコアから対象者を高群・中群・低群に分け、主に高群の特徴に注目した分析を行いつつ、低群間との比較も随時行った。

HIV 感染者は、身体・社会・自己の領域において幅広い困難が存在し、それらは時期によって出現・増大・漸減が存在する可能性が示され、介入時期へのヒントになると思われた。SOC 低群においてのみ、【病名で社会から切り捨てられる】といった直接的なスティグマが語られており、スティグマ経験が SOC を深く傷つける可能性があることが初めて示された。このような経験をした者のケアが急務であるのと同時に、差別偏見に対して公的機関から厳しく指導するシステム整備や社員教育の充実が求められる。

SOC 高群の者は職場環境や条件に恵まれており、彼らが遭遇した環境は、信頼する他者に恵まれるといった安心の感覚(sense of security)が得られ、さらに福利厚生に恵まれ、将来の見通しが得られるといっ

た【仕事に関する一貫性が保持できる】ものであった。これはSOCの下位概念のひとつである把握可能感に欠かせない職務保証を示していると思われ、仕事をしながら無理なく療養出来る職場風土、福利厚生制度や職場の理解促進が産業保健の視点から重要だと考えられた。

遭遇環境に恵まれない場合には、認知的・行動的対処をいかに取っていくかが鍵となった。例えば、【感染や関連する出来事をニュートラルに捉え】、【大切なことの境界ラインを現実とすり合わせて変化させ】、把握可能でも処理可能でもなくなったことを人生の重要領域外に持っていくという認知的対処を行っていた。これらは、従来のストレスコーピングパターンの枠組みでは捉えきれないものである考えられた。また、SOC低群が行動を起こさず最初から色々なことを諦めていたのに対し、高群は【不確実かつ困難なことにめげない】といった姿勢で【とにかくやってみようと考え行動】し、その結果としてうまくいかなかったとしても、結果には自分の意思と行動が反映されていることから、彼らは自分の判断を有意味だと捉えていたと考えられる。そして遭遇環境に恵まれ、あるいは対処を行うことによって彼らは【感染してしまったものは仕方がないと腹をくくる】【自分の人生を生き抜く覚悟を持つ】という心境に至っていた。SOC低群の者が「感染させられた被害者」という意識を強く持っていたこととは対照的に、高群の者は感染を自分の責任として引き受けていた。このような具体的なものの見方、考え方が患者教育、介入や心理サポートへの示唆になる可能性があると考えられた。

以上、本論文は、我が国のHIV感染者の就労と社会生活に着目し、全国調査データの二次分析を行うことによって就労者の精神健康に関連する要因を初めて明らかにした。また、質的研究において、SOCの高低を基準に分析を行うことにより、感染者の幅広い困難の詳細を明らかにし、直接的なスティグマ経験がSOCを脅かす可能性について初めて明らかにした。さらに、SOCの高い人たちにが遭遇している環境と対処の経験の特徴を明らかにすることで、SOCを可視化し、具体的な支援への示唆を得ることができた。以上より、本論文は学位の授与に値するものと判断される。